



●公益社団法人 日本山岳会 福岡支部

福岡支部報

目次

- | | |
|--|---|
| 1. 支部長挨拶
◎令和5年に当たり支部活動を進めて行く 1 | 5. トレッキング・山行記録
◎佐渡トレッキング・観光概要報告 16 |
| 2. 本部創立120周年記念事業「日本の古道を歩く」特集
◎国境の山岳信仰「脊振山系の峯入り廻峰道を歩く」 2
◎脊振山系の峯入り廻峰道の地質について 10 | 6. 令和4年度支部活動報告・令和5年度支部活動計画 20 |
| 3. 前支部長高木莊輔氏・前支部報編集長辻和毅氏追悼
◎辻和毅・高木莊輔両氏を悼む 13 | 7. 編集後記 20 |
| 4. 寄稿
◎「カンリガルポ」こぼればなし 14 | |

1. 支部長挨拶

令和5年に当たり支部活動を進めて行く

No. 9506

◇ 福岡支部長 浦 一美

昨年12月3日、3年ぶりの年次晩餐会が開催されました。古野淳会長の挨拶の中でコロナ禍でのこの2年間、全国の登山者や支部会員の方々の変わってしまった日常と苦難に慰労の思いを語り、再開された海外登山活動や、記念事業活動に支援、協力を呼び掛けました。

日本山岳会は2025年に迎える120周年記念事業として、各支部には「日本の古道を歩く」というテーマが与えられました。令和3年秋には宝満山より英彦山への「峯入り古道・春の道」を終え、そして令和4年には「国境の山岳信仰・脊振山系の峯入り廻峰道を歩く」と決定し、全長77kmを10月2日～11月20日まで5回に分け一般参加者を含め、延べ人数約145名で歩きました。天候にも恵まれ一人の落後者も出ず、秋の情景に恵まれた楽しい山行として終了しました。山行の中で参加者の方々と親睦を深めるため、BBQパーティーやキャンプファイヤーを行い、そして山の歌を歌うという、数十年ぶりの催しに歓声が上がりました。昔の山屋には当たり前のことですが、近年の登山者には斬新に映ったらしいのです。「来年はどんな山行を行うのか」という問いが山行の中でも聞こえてきました。「苦しかったが充実した山行ができた」という声に「新たな山行」を考えなければならないよう

です。支部会員諸氏と会合を重ね検討をしていきましょう。

他の令和5年度支部事業計画として、「夏山フェスタ福岡2023」が6月24日(土)、25日(日)に決定しました。その登壇者を考えているうちに、渡邊直子という人物が昨年から聞こえ始めました。看護師登山家という彼女は、大野城市出身で2021年までに8000m峰を7座登っています。そして昨年、ローツェ、ナンガパルバット、GⅡ、ブロードピーク、GⅠ、そしてマナスルと何と6座を1シーズンで登頂して行ったのです。あと残るのはシシャパンマのみということですが、チベットは現在、外国人には解放されていません。その彼女を登壇者に仮押さえすることができました。その他に自然観察会と講演会を予定していますので、多くの会員諸氏のご参加をお願い致します。

先ほどの「新たな山行」は秋のシーズンとし、「ロングトレイル」ではどうか、という案が出ています。英彦山々系から東の大分県にまで伸びている稜線や耶馬溪の山々が気に掛かっています。

— 2. 本部創立120周年記念事業「日本の古道を歩く」特集 —

くにざかい
国境の山岳信仰「脊振山系の峯入り廻峰道を歩く」

No. 9506

◇ 福岡支部長 浦 一美



基山から脊振山そして十坊山へ

福岡県と佐賀県の県境は、かつての筑前国と肥前国の国境で、東西に長く脊振山系の稜線が延びている。その稜線は標高 1,055m の脊振山を頂点として、東には蛤岳、石谷山、九千部山、権現山、基山。西には鬼ヶ鼻岩、獺師岩山、金山、井原山、雷山、羽金山、女岳、浮岳、十坊山と、標高 500m ～ 900 m 級の山々が連なり、山系の全長は 77 km にも及ぶ。自然崇拝に基づき、峰から峰を巡り歩く山岳密教の修験者による峰入り廻峰道のルートをもとに 5 回に分けて歩く。



基山山頂

草スキー場を下り、車道の手前で九州自然歩道に入る。

【第1回】 10月2日(日)
基山～柿ノ原峠～権現山～九千部山～石谷山～坂本峠

基山～坂本峠



柿ノ原峠への九州自然歩道

ここから柿ノ原峠まではアスファルト舗装の自然歩道となる。約 1 時間歩くと古屋敷集落に着く。ここより鳥居をくぐり石畳の道を登って行く。

7:40、JR 原田駅に集合。一般参加者 27 名、会員 4 名登山ガイド 1 名、計 32 名でスタートする。基山は、遠の朝廷・太宰府を防衛するために築かれた日本最古の山城跡で、土塁や礎石、水門跡が残っている。

原田駅より南の鉄橋を渡り、上原田の集落を抜ける。高速道路下をくぐり、山沿いの林道を登って行く。標識のある登山口から山道になる。お滝の行場過ぎ、植林の急坂を登りきると山城の一角、東北門跡に着く。支尾根に取り付くと礎石群が現れ、桧林を抜けると、長い頂稜の中央 (404m) に出る。



古屋敷の神社を抜ける



古い石畳を登る

峠を下ると県道 137 号に出て右折して柿ノ原峠に着く。



柿ノ原峠

九千部山への標識より林道を進みいよいよ登山道に入る。谷筋より植林帯の縦走路を登って行くと、権現山の分岐が出る。5 分で山頂、三角点があり小さな盤座がある。



権現山の盤座

縦走路に戻り、しばらくすると急な階段に出る。そこが大峠、さらに登って行く登山道の右側には車道が走っている。この付近より自然林が増え、歩きやすく気持ちの良い登山道である。山頂手前より車道に出て 10 分程で九千部山山頂（848m）に着く。山頂にはマイクロウェーブ塔が建ち、360 度の眺望である。



九千部山山頂の祠



九千部山山頂

南西方向へ向かう縦走路は九州自然歩道となり歩きやすく、大きなブナも点在し気持ちの良い道である。ゆっくり下って行くと三領界峠に着く。左折し 10 分でアカガシの樹林に包まれた石谷山（754m）に着く。



縦走路の石仏



三領界峠



石谷山

縦走路に引き返し、徐々に急坂を下って行くと七曲り峠の車道に出る。右手の福岡県側は荒れていて通行は不可。いよいよ最後の登りとなるが疲れた足には辛く呼吸も荒くなってくる。植林帯を抜け目の前が明るくなってくると終了地点の坂本峠（国道 385 号）に出た。



坂本峠

【第2回】 10月16日（日）
坂本峠～蛤岳～脊振山～鬼ヶ鼻岩～獵師岩山
～小爪峠～井手野



坂本峠～井出野

一般参加者 28 名、会員 5 名、登山ガイド 1 名、計 33 名でスタートする。国道 385 号線上の坂本峠から右折車道を行くと、脊振山上宮・東門寺の中宮である霊仙寺がある。8:40、坂本峠を出発。



坂本峠をスタート

石の階段を登り上がると、緩やかな植林帯の登山道が続く。1:20 分ほどで永山林道にでる。



縦走路



永山林道を横切る

水が流れる音がして一段上がると、水道に出る。蛤岳から那珂川への流水を佐賀県側へ流れを変えた蛤水道である。それを進むと左手に蛤岳の標示を見る。



蛤水道



蛤水道



蛤岳へ

樹林は次第に傾斜を増しながらリョウブやナラ等の自然林と変わる。山頂には修験者が護摩焚をしたとされる大きな二つに割れた花崗岩が鎮座する。10m 先に蛤岳三角点 (862m) がある。



巨岩の蛤岩



蛤岳山頂

縦走路である九州自然歩道はこれより北西方向へ伸びていく、植林が延々と伸び、近年はその伐採が進んだが、現在は自然繁殖が進み穏やかさを取り戻した。脊振山へ近づくに連れ昨年夏の台風による土砂崩れ等が目に着いてくる。航空自衛隊基地の下の木道が崩れ歩き難い。



脊振山へ



気持ちの良い木道

佐賀県側の田中登山口を合わせ、直ぐに「たにし仏」に出くわす。ここに脊振山・東門寺の入口があったと言う。石の階段を上ると山頂下の駐車場に出る。防衛省の入口の左手階段が山頂へ向かう。少し登ると右手に「役行者」がこちらを向いて座っていて、脊振山信仰の人々を見守っているという。



たにし仏

山頂の手前には石塔が並び石の鳥居が建ち、奥に祠がある。中には「弁財天」が祀ってある。脊振山山頂 (1055m)。その後ろには巨大なレーダーが存在し、異様だが日本の防空の西の要である。下の駐車場とその下のキャンプ場は脊振山・東門寺の跡である。すぐ横に小さいが「竜ヶ池」が残っている。ここより竜が立ち登り、背を振って行っただけで「脊振山」となったという。



脊振山の威容

脊振山頂



キャンプ場から木道を下り、气象台への車道に行く。10分で矢筈峠を過ぎ、九州自然歩道の縦走路へ入る。左右にはコバノミツバツツジが多く、春には多くの登山者が行きかう。途中、「唐人の舞」に寄ろう。ここはその昔、唐の国の人々が遠い故郷を思い岩の上で舞ったと言われる。しばらく行くと視界が開け、鬼ヶ鼻から金山の山々を望む。イヌシデやミズナラの樹林帯を過ぎ、下ったところが「椎原峠」で佐賀県側の一の谷と福岡県側の椎原の分岐である。更に20分で「鬼ヶ鼻岩」に出る。福岡県側に張り出した巨岩で脊振山頂や福岡市街や博多湾を見渡すことが出来、修験者達はこの岩をご神体として盤座とした。稜線に戻りやせ尾根のシャクナゲの林を抜けていくと、獺師岩山 (893m) に着く。ここの岩場には神を下ろし、遥拝する「華立」があったらしい。小爪峠から佐賀県側の「井手野登山口」に降りる。

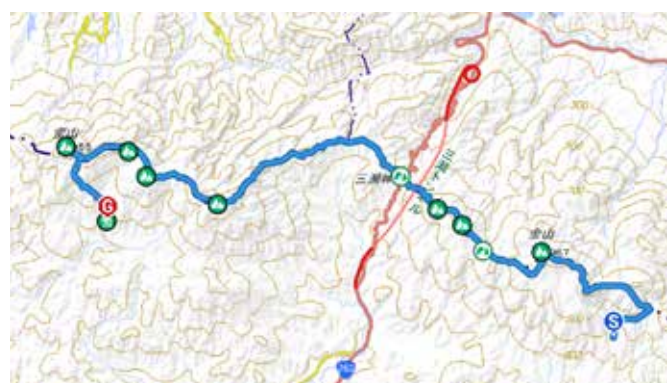


獺師岩山



谷筋を歩く

【第3回】 11月6日(日) 井手野～小爪峠～金山～三瀬峠～井原山～雷山 ～布巻林道



井出野～布巻林道

一般参加者19名、会員4人、登山ガイド1名、計24人でスタートする。福岡市内から三瀬トンネルを過ぎ、左手の脊振林道に入る。舗装された道を8kmで井手野登山口に着く。

8:30、登山開始。沢筋に沿って登って行くと30分で小爪峠に出る。アカガシ、タブノキの常緑樹が多い樹林帯は少々暗いが高度を上げていくと落葉樹に変わって行く。800m位からは葉を落とした樹林には大きなブナが点在し、



井手野登山口を出発



城の山



三瀬峠の石仏

まむし岩から
脊振山

水無と新村の分岐

ササが出始め三つのピークを過ぎると前方に井原山が直ぐそこに見える。983mの井原山は脊振山地の第二の高峰であり、360度の眺望が楽しめる。



井原山山頂

西を見ると雷山から羽金山、女岳、浮岳を望む。下ると直ぐにキトク橋分岐を分け、コバノミツバツツジやリョウブ等の林の中を進み、ブナ林の稜線も続いている。944mのピークに立つと緩い雷山の山頂がそこに見える。明るいブナの木々を過ぎ、ひと登りすると草原の雷山(955m)に着く。山頂には龍王塔と思われる大岩がある。下山は佐賀県側の布巻林道登山口に降る。



縦走路のブナ林



福岡市街を望む



金山山頂



山中地藏分岐

九州自然歩道は此处から佐賀県側へ伸びて行く。付近は水が流れ、草花も多い。緩くなった縦走路を下るとアゴ坂峠で花乱の滝へと分ける。樹林帯を登り三角点のある城ノ山(846m)から更に三瀬山を過ぎ国道263号線の三瀬峠に出る。此处から井原山への縦走路は昨年まで太陽光発電の工事で通行止めになっていたが、現在は通行可能になった。道は植林帯の中を登って行く。急な上りが続き周りは自然林に変わり、傾斜が緩くなると水無と新村の分岐に着く。



雷山山頂



布巻林道を下る

【第4回】 11月19日（土） 布巻林道～雷山～羽金山～荒川峠～真名子 キャンプ場



布巻林道～荒川峠

一般参加者 25 名、会員 4 人、登山ガイド 1 名、計 30 名。
そして車の会員 2 名の 32 名でスタートした。

今回は 1 泊 2 日の山行である。19 日の夜はキャンプ場に泊まり、BBQ とキャンプファイヤーを行う予定である。福岡市内から三瀬峠に上がり、佐賀県側の雷山林道に入る。12 km を走り、布巻林道登山口に到着する。



布巻林道登山口

8:40、登山開始。ゲートを越え舗装道路を 10 分で登山道に入る。植林帯を過ぎ、30 分で縦走路に出る。雷山山頂より急な自然林から植林帯を下ると旧スキー場の草原に出る。流れる風は心地よい。



松林の登山道



雷山へ

雷山山頂の龍王塔



前方にあった NTT のマイクロウエーブは現在は無い。西側のヤブ気味の中を下って行く。自然林から杉林に変わり、足元は滑りやすい。広域林道からの分岐の十字路を過ぎ植林帯を抜けると佐賀県側に車道が見えてくる。車道に出て 300m 先に県境の長野峠がある。



長野峠の羽金山登山口

羽金山へは公共の交通機関では行けないし、縦走には長いので登山者は極めて少ない。それだけに人にも合わず静かな自然を味わえる。延々と登りが続き緩やかになったところに白糸の滝への分岐を分ける。更に急な登りとなり、山頂を囲う金網に当たる、回り込み標準電波送信所入口の車道にでる。羽金山山頂（900m）と三角点は送信所の中にあるため、入所するには許可が必要。



うっそうとした登山道

金網に当たる



電波塔入口

羽金山山頂



入口に戻り、西の稜線を目指す。直ぐにショウジョウバカマの群落があり、その先はアブラチャンの気持ちの良い林が繋がる。二回目の白糸の滝分岐を分け、794mピークを過ぎ、樋ノロハイランド分岐を分け植林帯の中のアップダウンを繰り返し、荒川峠に到着する。ここに会員の車が迎えに来る予定だったが、9月の14号台風により途中の林道が大きく崩壊し、やむなく30分歩くことになった。16:00、宿泊地の真名子キャンプ場に到着する。



アブランチャンの林



白糸の滝分岐



荒川峠



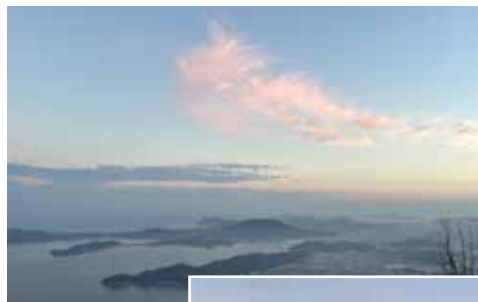
林道が土砂崩れ

【第5回】 11月20日(日) 真名子キャンプ場～二丈岳(往復)～女岳～ 荒谷峠～浮岳～白木峠～十坊山



真名子キャンプ場～十坊山

6:00、ライトを照らし出発する。杉林の中は更に暗い。30分で林道終点に出て、明るくなった自然林の登山道を山頂へ向かう。6:40、巨岩の二丈岳(711m)山頂。太陽が出る前の山頂からの景色は墨絵のようで、玄界灘から博多湾の海岸が大きな模様を見ている感じだ。壱岐ノ島も手に取るように見える。この山頂下にも経塚があったのである。暫しの眺めでキャンプ場へ下る。



早朝の二丈岳から



二丈岳

朝食後、8:00、出発。林道の崩壊のため、昨日の荒川峠には行けず、女岳の縦走路を目指す。真名子登山口より林道に上がり、直ぐに女岳登山口となる。植林帯の急登が続くが20分で縦走路にでる。



縦走路に出る



女岳山頂

大きな船岩を過ぎると女岳（748m）の山頂に出る。正面に二丈岳を見て、左手に玄界灘を望む。自然林から杉林の中を下り、荒谷峠への車道に出る。正面にはピラミダルな浮岳が存在感を露にしている。車道を150m程進み、右手の浮岳登山口に取り付く。



荒谷峠に出る

伐採された斜面が多いが、縦走路は植林帯の中を登って行く。自然林に入っても急傾斜は続き、林道の終点から上がってくる遊歩道と合流する。わずかに上がると赤の鳥居が出て潜ると白龍稲荷が祀ってある。その上の巨岩が「獅子駒岩」と呼ばれ、盤座であり護摩焚の場所である。此处は最高の展望台となり海岸線から玄界灘を望む。



白龍稲荷神社



獅子駒岩

獅子駒岩
からの眺望

更に急坂から緩やかになる稜線を辿ると、大きな鳥居がある浮岳神社上宮で、浮岳山頂（807m）になる。祠は玄界灘に向かって建てられ、海洋の安全を見守っている。



浮岳山頂

縦走路は西に緩やかに下るが次第に傾斜を増してくる。自然林から植林帯に変わり、傾斜が緩くなると左手にゴルフ場が出てくる。右手に車道が見てくると間もなく県道143号の白木峠に到着する。



白木峠に下る

いよいよ最後の十坊山を目指す。この白木峠よりの登山道は防火帯であり、以前は草原であったが、現在は常緑樹が植えられ日差しが遮られるようになった。二段の急斜面を登り上がると大きな岩が鎮座する十坊山山頂（535m）に着く。左下には虹ノ松原が弓状に伸び、奥に鏡山を望む。この大岩も盤座であり、すぐ下で護摩焚を行ったらしい。振り返ると、二丈岳、女岳、浮岳が気高くも見え、懐かしささえ感じる。集合写真を撮り、中村登山口へ降りる。



十坊山山頂



坊主岩

十坊山山頂より
二丈岳・女岳・浮岳を望む

脊振山系の峯入り廻峰道の地質について

No. 15240

◇ 柴田 佳久

日本山岳会福岡支部では、令和3年10月～12月にかけて行った「宝満山より英彦山へ 悠久の峯入り古道を歩く」に続いて、令和4年度は「国境の山岳信仰 脊振山系の峯入り廻峰道を歩く」を企画し、10月2日～11月20日にかけて5回に分けて歩きました。脊振山（標高1,055m）を最高峰として東西約77kmに及ぶ稜線には、標高500m～900mの多くの山々が連なっています。この稜線は福岡県と佐賀県の県境、かつての筑前国と肥前国の国境です。多くの峠道もあり、いにしえの人々の行き来が偲ばれます。

今回の山行には、毎回20数名の参加があり、中には昨年度に引き続いて全ての山行（計11日間）に参加された方もおられました。それぞれの山に登ることはあっても、交通の不便さから全山を縦走する機会は少なく、参加者も満足されているようでした。また、4回～5回目は木の香ランドキャンプ場に泊り、夜はキャンプファイヤーを計画しました。ほとんどの方が数十年ぶりということで、楽しんで頂けたのではないかと思います。

◇地質の概要

地質的には、宝満山から英彦山のルートと違って、変化が少ないルートになります。登山道で観察される岩石の種類も少なく、大部分は花崗岩類からなり、一部で変成岩類が見られます。

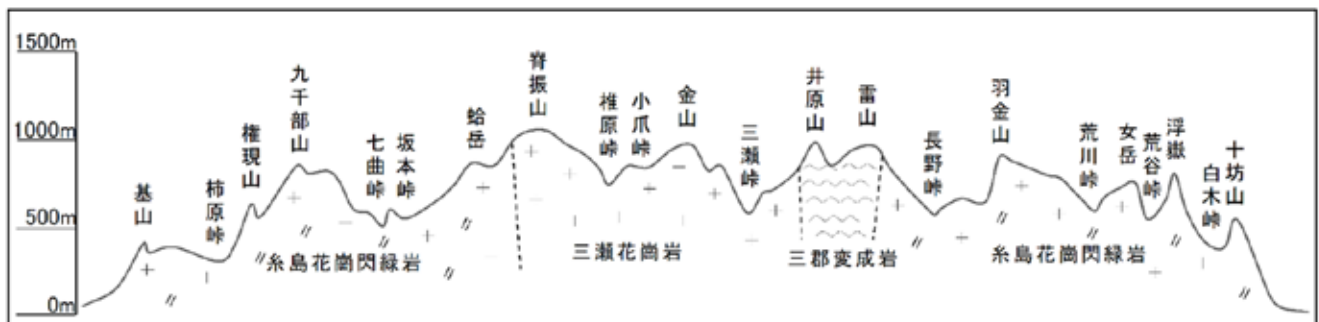


図-1. 脊振山系の峯入り廻峰道に分布する地質の概要図

花崗岩類

マグマ（岩石がドロドロに溶けている状態）が固まった岩石を火成岩と言います。このうち、地上や地下の浅い所で固まった岩石を火山岩と言います。普賢岳の溶岩ドームや三原山の溶岩流は火山岩（安山岩や玄武岩など）に区分されます。一方、花崗岩類は深成岩に区分されます。深成岩は、マグマが地下深い所で数十万年～数百万年をかけてゆっくりと冷え固まり、その後の地殻変動で地表まで上がってきた岩石です。時間をかけて固まるために、鉱物（石英・長石・黒雲母）が大きく成長することができ、肉眼でも一つ一つの鉱物粒子を確認することができます。

花崗岩類は、基山～脊振山および雷山～十坊山にかけての糸島花崗閃緑岩、脊振山～井原山にかけての三瀬花崗岩に分けられます。なお、花崗岩と花崗閃緑岩の違いは、含まれている鉱物の割合の違いによるもので、岩石のでき方や性質は変わりません。

変成岩類

変成岩類は、既にあった堆積岩や火成岩などの岩石が地球内部の動き（プレート運動）や火山活動などによって熱や圧力を受け、鉱物の組合せ（別の鉱物に変わる）や組織（配列が変わる）あるいは化学組成などが変化して別の岩石になったものです。

井原山から雷山にかけて分布する三郡変成岩は、花崗岩

類が貫入する以前から変成作用（広域変成作用といいます）を受けており、一方で冷え固まる前の花崗岩類の熱による変化を受けた岩石（接触変成作用といいます）とされています。岩石名は、鉱物粒子が再配列し、きれいな縞模様となった結晶片岩（片岩ともいいます）です。

結晶片岩の中でも、主に緑色片岩や泥質片岩からなり、砂質片岩も含まれます。変成岩が変化する前（熱や圧力を受ける前）の岩石を原岩と言います。緑色片岩は火成岩（玄武岩などの火山の噴出物が固まった岩石）を原岩とします。泥質片岩は泥岩、砂質片岩は砂岩などの堆積岩（砂や泥などが水中で積み重なり、長い時間かけて押し固められた岩石）を原岩とします。



写真-1. 代表的な花崗岩



写真-2 代表的な結晶片岩

◇基山～脊振山・雷山～十坊山

今回の登山道で最も多く出てくるのが花崗閃緑岩（糸島花崗閃緑岩）です。糸島花崗閃緑岩は、中生代白亜紀（約1億4500万年前～6600万年前）の中で古い時代（約1億1600万年前）にできた岩石とされています。白亜紀の日本列島は、まだユーラシア大陸の一部です。陸地ではティラノサウルスなどの恐竜が繁栄した時代です。



写真-3 二丈岳頂上の糸島花崗閃緑岩



写真-4 十坊山頂上の糸島花崗閃緑岩

◇脊振山～井原山

この区間には花崗岩（三瀬花崗岩）が分布しています。三瀬花崗岩ができた地質時代も中生代白亜紀ですが、糸島花崗閃緑岩より新しい白亜紀の終わり頃（約9000万年前）の岩石とされています。なお、白亜紀の終わりは、恐竜が減った約6600万年前とされています。恐竜を含む生物の大量絶滅の原因としては、メキシコのユカタン半島北端に落下した巨大隕石による気候の変化とされています。



写真-5 鬼ヶ鼻岩の三瀬花崗岩



写真-6 登山道の風化した三瀬花崗岩

◇井原山～雷山

井原山を少し下った付近から雷山の頂上にかけて三郡変成岩の緑色片岩や泥質片岩が分布します。三郡変成岩は、古生代石炭紀～ペルム紀（約3億5900万年～約2億5100年前）の地層とされています。泥質片岩が見られることは、3億年前は海の底であったということになります。ペルム紀の始めは、赤道付近あったユーラシア大陸と南半球から北上してきたゴンドワナ大陸が衝突し、パンゲア大陸と呼ばれる超大陸（現在分かれている大陸が一つになった状態）ができた時代になります。日本列島は、赤道あたりの海底にあったかもしれません。



写真-7 雷山頂上の三郡変成岩



写真-8 雷山手前の三郡変成岩



写真-10 巨大な鉱物の結晶

一周辺地域の地質ガイドー

◇長垂のペグマタイト岩脈

JR 今宿駅から国道 202 号を約 1.4km 福岡方面に向かって歩くと、海岸から突き出た直線的に並ぶ岩場が見られます。国指定の天然記念物（昭和 9 年 1 月 22 日指定）の含紅雲母ペグマタイト岩脈です。国道を挟んだ山側にある長垂公園にはこの説明板があります。ペグマタイトは、石英（水晶）、長石、雲母などの鉱物が非常に大きな結晶となった火成岩（深成岩）で、巨晶花崗岩とも呼ばれます。岩脈とは、地層（岩石）の割れ目沿いに後からマグマが貫入して、冷え固まった火成岩のことです。長垂のペグマタイト岩脈は、糸島花崗閃緑岩中に早良花崗岩が貫入したものです。糸島花崗閃緑岩は風化によってマサ化（真砂土のように砂状になること）が進み、軟らかいために波浪によって削られ、固いペグマタイト岩脈が取り残され、このような特異な地形になっています。

天然記念物に指定されたものの、紅雲母（リチア雲母）にリチウムが含まれていたため、戦時中には軍事利用のために旧陸軍によって採掘が行われていました。長垂公園から山側に登り、JR 筑肥線のトンネルを越えたあたりに採掘したときの捨て石場（ズリ捨て場）の跡がありますが、現地で紅雲母を確認することは難しいようです。



写真-9 ペグマタイト岩脈

◇井原山登山口の水無鍾乳洞

井原山の北東側の水無登山口近くに、水無鍾乳洞があります。鍾乳洞は結晶質石灰岩中に作られたものです。結晶質石灰岩も三郡変成岩の一部で、石灰岩を原岩として変化した岩石です。石灰岩はサンゴや貝などの石灰質（炭酸カルシウム）の殻をもつ生物を起源とする堆積岩です。鍾乳洞は、石灰岩が長い時間をかけて雨水や地下水と反応し、浸食されて空洞となったものです。水無鍾乳洞は、全長 1,630 m の長い鍾乳洞です。昔は第二洞口から第一洞口まで入ることができたようですが、現在は立入禁止となっています。

◇糸島半島の山々・岩場の地質

脊振山系からは玄界灘と糸島半島が一望できる場所が多くあります。糸島半島には、可也山など日帰りで楽しめる低山があります。山頂から眺める玄界灘は一見の価値があります。最近は登山者も少ないようですが、野北の海岸は岩登りのグレンデ（練習場）です。また、観光スポットとして茶屋の大門も有名です。これら糸島半島の地質を簡単に説明します。

糸島半島は、脊振山系と同じく三郡変成岩や糸島花崗閃緑岩などの古い時代の岩石が分布し、その上に火山岩である玄武岩がのっています。玄武岩は、新生代新第三紀（2303 万年前～258 万年前）の中でも比較的新しい時代（約 300 万年前）の火山活動で流れ出た溶岩です。

・可也山

可也山は、糸島富士や小富士と呼ばれる左右対称の稜線をもつ独立峰です。大部分は糸島花崗閃緑岩からなりますが、山頂部に玄武岩の溶岩が見られます。

・火山

火山という名前ですが、糸島花崗閃緑岩からなります。

・立石山

糸島半島の西の突端にある立石山は、糸島花崗閃緑岩からなります。

・毘沙門山

糸島半島の東の突端にある毘沙門山は、三郡変成岩の砂質片岩や泥質片岩からなります。山頂部には玄武岩の岩頸（がんけい）が見られます。岩頸は突岩（とつがん）ともいい、火道（火口直下のマグマの通り道）の中で地上に出る前のマグマが冷え固まって岩石になり、その後周囲が浸食されて塔のような形で地表に現れたものです。



写真-11 毘沙門山（玄武岩の岩頭）



写真-12 芥屋の大門（玄武岩の柱状節理）

・野北海岸

野北の岩場は、三郡変成岩の緑色片岩からなります。美しい縞模様を示していますが、平板状に割れやすい岩石です。野北石と呼ばれ、石碑や庭石の石材として使用されていたそうです。

・芥屋の大門

玄界灘に突き出た小半島の先端にある海蝕による洞窟で、国の天然記念物に指定されています。柱状節理が発達した玄武岩からなります。柱状節理は、火山から流れ出た溶岩が冷え固まるときに、岩石が収縮してできる規則正しい角柱状の割れ目のことです。断面は六角形のものが多く見られますが、四角形から八角形まで様々な形があります。

・姫島

玄界灘に浮かぶ姫島は、糸島花崗閃緑岩からなります。鎮山の頂上付近には玄武岩が分布します。

脊振山系や糸島半島の地層の成立ち、分布、時代などを説明してきましたが、これらは新しい考え方や分析技術の進歩によって変わることがあることを書き添えておきます。

参考文献

日本の地質「九州地方」編集委員会（1992）『日本の地質 9 九州地方』唐木田芳文監修，共立出版
福岡県地学のガイド編集委員会（2004）『福岡県地学のガイド』唐木田芳文監修，（株）コロナ社
日本地質学会（2010）『日本地方地質誌 8 九州・沖縄地方』，（株）朝倉書店
松本恒夫・小川留太郎，鉱物採集の旅（3）「九州北部編」（1975），築地書館（株）

3. 前支部長高木莊輔氏・前支部報編集長辻和毅氏追悼

辻和毅・高木莊輔両氏を悼む

No. 6486

◇ 太田 五雄

一昨年は辻和毅さんが亡くなられ、昨年は前支部長の高木莊輔さんが亡くなられた。日本山岳会福岡支部に多大な貢献をされたお二方については福岡支部報 No. 35 号の巻末「訃報」で会員皆知るところである。このお二人を偲んで一筆寄せていただく。



2005年第4次カンリガルボ踏査時の辻和毅氏

■辻 和毅氏のこと

辻さんとの出会いは私がしんつくし山岳会入会間もない頃で60年ほど遡る。当時松本恒夫氏をリーダーとして大山の南壁大休峠で何度か冬山合宿をした。その中で、一度辻さんが参加されている九州大学探検部と一緒にいたことがある。

辻さん等は、大休峠に冬山訓練と

してイグルーを作り冬山体験宿泊をされていたが、私達も興味があったので見学をさせていただいた。そこにはイグルーというよりは竹の子のようなイグルーが立っていたが、我々はポリボックスと言って嘲笑した思い出がある。

しかし、さすが九大生である。数日たつて九大探検部の報告書が送られてきた。そこにはイグルー内の温度分布を測定し、冬山の体験談など加えて様々な考察が報告されていた。ただ冬山を楽しむのではなく、冬山の研究論文が事細かく書かれ、さすが九大生だと感心したのを思い出す。

その後九大探検部は北海道の冬期サロベツ原野で帆ソリ縦断を試みたが、なんせ雪の経験浅い九州人の挑戦とあって、あっけなく失敗に終わった。

辻さんにはいつも意外性があり、思いもよらぬことを考えておられる方で、数年後辻さんは日本工営社員として北九州市総務部の方と突然我家を訪ねてこられ、平尾台の近くの公園にクライミング人工壁を作る計画があり、相談に乗ってほしいとのことであつた。しかし当時は時期尚早で、北九州のクライマーはわざわざ人工壁でやらなくても平尾台の岩場、苅田の採石場跡の岩場、皿倉山の国見岩、香春岳の岩場、英彦山望雲台など実践的ホームグラウンド

があり、北九州の多くのクライマーに親しまれていた。

結局この計画は頓挫したが、近年クライミングがオリンピックや世界大会が行われている現状を思うと、当時辻さんが思い描いていた構想が今や現実のものになったことに痛感させられた。

一方海外の山ではミャンマーへの思いが強く、辻さんと親交の深かった故松本先生もアジア最後の秘境と言われたミャンマーの最高峰幻の山カカボラジ (5881m) に大変興味を示されていた。

辻さんのミャンマー研究は国内でも高く評価され、当福岡支部報にも数回寄稿されていたことは会員諸氏の知るところである。カカボラジは山に近づくことさえ困難とされていたが1996年尾崎隆氏によって初登頂された。尾崎氏は2011年エベレストで逝去され、この地域を知る唯一の日本人として今尚惜しまれている。



2012年支部忘年登山
(可也山)の高木荘輔氏

■前支部長 高木荘輔氏のこと

高木氏は第10代福岡支部長として2期4年間で、さらにコロナの関係で1年延長され、計5年間で勤められた。その功績は過去に例のない優れた支部長として私の印象に残る。

支部長として最後の一年は病魔に侵されながらもその責任を全うされた精気は私の生き方に教訓として心に残る。その温和で心豊かな人柄は私もうこうありたいと思ったことである。

私と高木さんとの山行は私が屋久島に居を構えていたことから、一緒にする機会が得られなかったが、2007年の福岡支部50周年記念事業としてカンリガルボ山群の旅に

同行し、初めて高木さんと一緒にすることになった。

私の福岡の山仲間はどちらかというと故松本徂夫氏を中心として、また旅行中「第9回秩父宮記念山岳賞」が決まったことを知らされたことから、酒に侵されるとなんでもやれやれのがらっぱちが多い中、高木さんはいつも物静かににこにこ微笑まれ辺境の地を楽しんでいたのを思い出す。

特に、私は時々福岡に帰っては故松本邸の仏壇の前に、松本徂夫氏、長兄岳士氏を偲び会員仲間と飲むことを常としていた。そこには必ず高木さんが同席していた。一度は声をかけてもいないのにどこから聞きつけたのか松本邸の前に高木さんがにこにこ待ち受けておられたことが印象に残っている。

もともと高木さんはヨーロッパの山に精通され、ヒマラヤを主とする福岡の岳人にとっては貴重な存在であった。

闘病中、私の最後の著書「屋久島総覧」をご購読頂いたのが何よりもうれしい。九州最高峰の聳える世界自然遺産屋久島を知っておきたかったのであろう。

福岡支部に至ってはかけがえのない重鎮を次々なくしたことに心痛の思いである。これまでの先達のご指導、ご厚情、ご交友に心から感謝し、心からご冥福をお祈り申し上げる次第である。

(注)

辻 和毅氏

会員番号 7698

1973年12月松本徂夫・吉沢一郎両氏の紹介で入会

2021年(令和3年)7月28日ご逝去、享年78歳

高木 荘輔氏

会員番号 12920

1998年10月松本徂夫・松本康司両氏の紹介で入会

2022年(令和4年)2月18日ご逝去、享年86歳

4. 寄稿

「カンリガルボ」こぼればなし

No. 10309

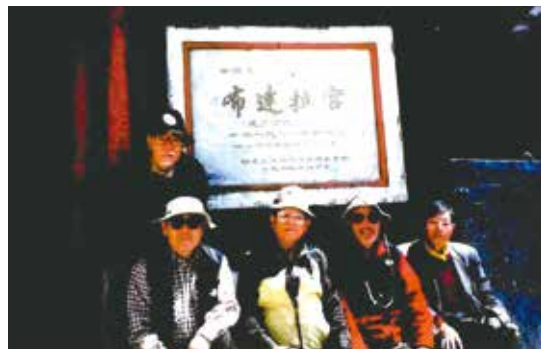
◆ 中山 健

10年ひとむかしという。ならば20年前はむかしむかしであろう。そのむかしむかしの2001年～2005年の間、日本山岳会福岡支部(以下福岡支部)は東チベット、ヤルツァンボ大屈曲部の東に連なるカンリガルボ山群の探査を元支部長の故松本隊長のもと5回実施した。得られた成果は中国の学者の知見やヨーロッパの探検家、プラントハンターなどの足跡とともに取りまとめられ松本徂夫編著辻 和毅、渡部秀樹著「ヒマラヤの東端日曜布山群踏査と探検史」として出版された。(2007年4月20日)

この大著の題材は書斎や山岳会のルームなどで読まれ語られるようなアカデミックな事柄である。また、ちまたで、あるいは自賛(自嘲かも)で、「福岡支部報の記事はアカデミックだ」という声を耳にしている。これに対して、これから述べるのは、俗でたわいのないはなしである。居酒屋や屋台での酒の肴にされるにふさわしいはなしである。



ガンリガルボ周辺概念図



一次(2001年)探査時の面々

然鳥にて

2001 年春 1 次探査で昆明を出て 6 日目、ゴルジュを抜けると空の向こうに雪山が見えた。山裾の湖面にその影が映っていた。美しい風景のなかに道の両側に 10 軒ほどの建物が建ち並ぶ街があった。「カンリガルボ」最初の泊りの地、然鳥（ラウ）である。

トイレが前庭の小屋のなかにあった。用を足そうとして扉を開けたとたん、たじろいだ。素掘りの穴のうえに渡した踏板の間に盛り上がったものを見たためである。下の溜めが満杯となり先蹤者たちが落としていったものが行き所なく上に積みあがっていたのである。深く腰をおろさず中途はんばな姿勢ですませことなきをえた。

翌朝、適地を求めてあちこち探索した。幸い宿の裏手に発見。雄大な風景のなかで至福のひと時を過ごすことができた。（大自然を汚すものは収まるべきところ収めた。）

松宗（ソンゾン）の北の谷にて

然鳥からカンリガルボ山群の北限を西に流れるパルンツァンポの谷を 60～70 km ほど下ると、昔ゴンパ（チベット仏教寺院）を中心として栄えた松宗がある。南には岩峰が迫っているが北と西は広くて開放感あるところである。

1920 年～1930 年代、フランス人女性チベット仏教学者ダヴィット・ネールやイギリス人探検家ハンベリイ・トレイシーがこの北の谷を通ったという。上流の曲宗にはラサの出先政庁が置かれていた時期もあったことから、この谷筋は重要な交通のルートであったことが窺える。

2004 年（4 次）に 10 km ほどこの谷を遡った。西から流れ込む支流のモレーンや U 字谷など過去の氷河が残した景色を楽しみながら上流に向かった。本流の大きなモレーンを越えると戸数数軒の村があり、その周りの林のなかに牛が草を食んでいた。その近くで A 氏がたちしよんを始めた。とたんにこの牛が駆け寄り A 氏の腰のあたりに口先を持っていた。A 氏は落ち着いてその姿勢を保ち続けていた。その先の事態は直接見るわけにはいかない。しかし想像はできる。牛は A 氏のノズルから噴出する塩分を含んだ液をじかに飲んでいてに違いない。かつて仙酔峡でテントを潰され味噌などを食い荒らされたことを思い出した。万国の牛は塩分に飢えていることをあらためて思い知った。A 氏は親しみと愛情ある態度で牛に接し続けていた。

通麦（トンマイ）にて

カンリガルボ山群の西の端、ニンチェンタンラ山群のなかを流れ下ったイゴンツァンポとパルンツァンポが合流するあたりに通麦の村がある。ここに一軒のうどん屋があった。店のまえを通るたびに立ち寄りたくなるような大変うまいうどんをだす店である。ある時チベット人運転手達とうどんをすすっていると中国本土から来たらしい 4～5 人の一団が入って来た。とたんに店は大音量で満たされた。かれら一人一人の話し声は尋常でない大きさであった。われわれが日本人とチベット人とみてマウンティングをしていると思った。大きな声で自分たちの優位を示そうとする意図が見えた。数分続いたのちわが運転手の一人が口を開いた。負けないくらいのでかい声でかれらに向かって話し始めた。すぐに大音響はぴたりと止み静寂が戻った。なに

を言ったかは分からなかったが「静かにしなさい」と言って、その無礼をたしなめたに違いない。

中国国旗に描かれている大きい星の人達が小さい星の人のひと言に直ぐに従うという珍しい「事件」に出くわした。

波密（ポミ）にて

通麦からパルンツァンポ沿いの川蔵南路（四川省から拉薩までの南回り幹線道路）を 90 km ほど上流に向かうと波密がある。川蔵南路の両側に商店、役所、宿泊所などが並ぶこの谷唯一の都会である。街の南側を流れるパルンツァンポの河畔からの眺めはとくにすばらしい。川むこうにシンギカンラ（5688m）という峰が圧倒的高さで聳え、上流下流にも氷河をまとった峰が望まれる。波密は間違いなく美しいところである。

その河畔に一軒の焼鳥の屋台が出ていた。店主はイスラム風の帽子を着けた若い男であった。肉は有名な「ポミの豚肉」でなく、ヤクか羊であったのであろう。波密に泊まるたびにここの串をつまみにして中国産ワインを嗜むのを常としていた。4 次するとき、串を仕入れ宿へ戻っていると店主が追って来た。支払いが足りなかったのかと一瞬思ったが逆であった。われわれに払った釣銭が少なすぎたとして数百メートルを追ってきたのであった。

翌年、5 次するときにはその屋台はなかった。屋台は禁止されたということである。



波密、パルンツァンポ河畔からのシンギカンラ（5688 m）

おわりに

あれから 20 年余経た今、然鳥はエレガントなホテルが建つような町に生まれ変わり、米堆谷には自動車道路が入り込み、うるさい人達で混雑しているという。川蔵南路も通麦付近の危険な地滑り地帯を避けるためトンネルが掘られて速く安全に通られるようになったようだ。

チベットはもはやフロンティアではないという。中国本土出身の人達によるチベットの開拓が終わりチベットはその人達の定住生活圏になったという事であろう。

家に招き入れヤク乳のヨーグルトなどを振る舞ってくれた米堆谷のやさしい村人たちや、二度の入村にもおだやかに受け入れてくれた拉古の村人たちの生活も大きく変わったに違いない。その変わり様が気になるところである。

5. トレッキング・山行記録

佐渡トレッキング・観光概要報告

No. 16732

◇ 原 義宣

2022年5月22日(日)～25日(水)3泊4日

メンバーは会員の淀川雅之、飯田建夫、中村寛三、長岡ミヅ子、原義宣及び一般参加者2名

5月22日(日)

福岡空港から新潟空港の移動、フェリーに乗り継ぎ佐渡両津港に到着。

5月23日(月)雨

7時前に出発。体調により金北山經由白雲台までの約14kmの縦走組とドンデン高原散策組に分かれて行動した。早朝雷雨を伴う荒れた天気で心配したが、9時頃から雨も上がり回復するとの天気予報で出発した。しかし、ほぼ全ルートで北東の強風と小雨に見舞われ、立ち止まって眺望を楽しむことは出来なかった。幾つかの緩やかなアップダウンの縦走路であったが、金北山山頂直前の約30mの残雪の急登で先行の女性3人組の一人の滑落危機を先頭の飯田さんが足で止め、事故を未然に防ぐというエピソードもあった。別ルートで山頂にたどり着くも風が冷たく山頂到着を喜ぶ余裕もなく、風をよけ慌ただしく昼食を済ませ直ぐに下山を開始した。14時ごろにコースタイム通りに白雲台に無事到着。皮肉にもこの頃になると晴れ間も出たが2時間以上もの待ち時間。お茶やビールを飲みながら時間をつぶす。予約していたライナーバスで宿に戻った。



シラネアオイ

5月24日(火)晴れ

観光組とトレッキング組に分かれて行動。トレッキング組は積雪のために閉鎖されていたが24日から開通した和木登山口までタクシー。白瀬登山口からだて厳しいなあと思っていたがほっとした。この日は晴天に恵まれ、和木登山口近くの大佐渡石名天然杉の遊歩道を巡り、深い積雪にも負けず逞しく生き延びた杉の群れに感動。



シラネアオイ

続いて和木山經由で一旦下り、金剛山山頂へ。祠にお参りし、立ったまま昼食を済ませ下り始めた。休憩に良さそうな場所には必ず大きなアリ塚があり、立ち止まると蟻が這い上がってくるから足も速くなり予定より早く下山できた。佐渡は新潟本土との距離が60km以上あるために、動物(熊、猪、鹿など)が生息しておらず、多種多様な花々が咲き誇っているとの事。はなの美しさは勿論であるが、木々の葉の瑞々しさ、美しさが印象に残った。



カタクリ

観光組は島を半周して海、二つ亀岩、海岸のカンゾウなどの花々たらい舟、鉱山跡など満喫されたよう。

5月25日(水)晴れ

フェリー出発までの時間を利用して、トキの森公園に足を延ばし、トキの生態にも触れることが出来た。

今回は駆け足の旅であったが、もう一日島内を巡る時間があればより思い出に残る旅になったであろうと反省した次第です。

北アルプス表銀座縦走 燕岳～大天井岳～常念岳山行報告

No. 10797

◇ 酒匂 輝昌

コース：松本～穂高～中房温泉～燕岳～大天井岳～常念岳
～一ノ沢～穂高～松本

期 間：令和4年9月10日（土）～13日（火）

参加者：No. 14882 飯田 建夫 No. 16732 原 義宣
No. 14391 中村 寛三 No. 10797 酒匂 輝昌

参加者は79歳1名、77歳3名と80歳間近の男性4名。
1年に1度は3000mの風に吹かれないと燕岳～大天井岳～
常念岳を歩いたので報告します。

1日目（9月10日） 福岡～松本～穂高～中房温泉

福岡空港8時15分発（FDA）にて松本へ。バス、JRと乗り継いで穂高へ。穂高では穂高神社に参拝し、バスにて中房温泉へ15時50分宿着。宿泊の手続きを行なうが「予約は入っていない。今日は満室」と。スマホの記録を見せ予約済み传达了。暫く待たされた後8畳間に案内され隣の8畳間も使っていると。コロナ禍宿泊者制限で空室があったと思われ一安心。荷物を置いて温泉に、大きな浴場に先客なし。夕食まで小屋前のテーブルで一息、翌日の好天を願った。



翌日の好天を願って

2日目（9月11日）中房温泉～合戦小屋～燕山荘～燕岳 ～燕山荘

雲が低い、7時半出発。



中房温泉を出発

登山口へ向かうが入口付近は混雑、道に入ると行列。この時期、夏休みは終わり紅葉には早く、静かな山行が出来ると思って来たが当て外れ。道は最初から樹林中の急登。私たち4人は80歳間近、暫くは元気に歩を進めたがそれなり。後から迫る元気なグループに先を譲り、また勢い良く下って来る人に道を譲りながら登った。第一ベンチ、第二ベンチと小休止を入れたが、先客が多く腰を下ろす所もすぐには見つからない。急登は続き第三ベンチ手前で左足膝を痛めていた中村さんが大事を取って下山。その後3人、富士見ベンチをパスして12時合戦小屋着。



賑わう合戦小屋



合戦小屋の名物の西瓜

ここもいっぱい、席が空くのを待って名物のスイカを食べる。一休みして再び林の中の急登を進み、樹木の丈が低くなって合戦の頭。大天井や槍ヶ岳が見えるとあるが見えない。前方に燕山荘が見えてほっと一息。山荘を見ながら進んで14時30分山荘着、燕は見えない。



燕山荘が見えてほっと一息

山荘の周囲にはベンチが沢山用意されているがここも空いた席はなく、“コロナはどこ”といった感じ。一方、山荘内はコロナ厳戒態勢。ザックを置いて燕へ。白い砂状の道、花崗岩の中を 30 分進んで山頂 2763m 着。雲の中、写真を撮って下山。途中ハイ松を出入する 10 羽近くの雷鳥に遭遇、暫く様子を見る。



燕岳 (2763 m)



ハイ松を出入りする雷鳥

山荘に戻り空きベンチを見つけて燕登頂に乾杯。山荘では夕食時、主から燕周辺の自然や遭難防止等の話があった。興味深い内容だったがその間、宿泊者の会話は聞かれず、コロナ対策の一つかと思われた。

3 日目 (9 月 12 日) 燕山荘～大天井岳～常念小屋

5 時半、雲海の奥が明るくなり日の出。北側に目をやると昨日登った燕が朝日を受けて神々しい。その右奥に鹿島槍、左側遠くに立山・剣岳。また西側、離れているが高瀬川を隔てて裏銀座の岳々が赤く輝き、南方向には雲に浮かぶ槍、大喰岳を見ることが出来た。



燕山荘からの燕岳



朝日を受け神々しい燕岳



日の出



大喰岳 (左3101m) と槍ヶ岳 (右3180m)

7 時 20 分山荘出発、雲が出て大天井方向は見えない。よく踏まれた道を蛙岩、大下りの頭と幾度か上り下りして小林喜作のレリーフに到着。大天井の直下で槍と常念の分岐。視界は 100 m 以下で頂上は勿論、進む先も見え無い。長い坂を登って大天荘着。小屋の脇にザックを置いて 10 分、今回の山行中最も高い大天井山頂 2922m 着、人影なし。



大天井岳 (2922 m) 左から酒匂・飯田・原



眼下に常念小屋と常念岳（2857 m）を望む



常念岳山頂（2857 m）の原

小屋に戻って昼食。一休みして常念を目指し出発。長い穏やかな道を進み、東大天井岳を巻いて横通岳の肩を回ったところで眼下に常念小屋。急坂を下って15時30分小屋着。ここもコロナ厳戒態勢。ドアのある個室、トイレは洋式・水洗、床はピカピカでスリッパなし。宿泊の手続きを済ませ大天井登頂に乾杯。

3日目（9月12日） 常念小屋～常念岳～常念岳～一ノ沢～穂高～松本～福岡

4時起床。朝食を済ませ5時20分常念山頂に向け出発、道はガラガラの急坂。キツイ登りを覚悟していたが空身、途中日の出を見たことなどから楽に登れて6時30分山頂2857m着。

頂上は狭く石の上に祠、大勢の登山者で賑わっていた。キレットと涸沢は見えるが槍穂の稜線は見えない。先に着いていた原さんと合流、写真を撮って下山7時40分小屋着。

身支度を整え8時10分、一の沢に向かって下る。暫くは長い急坂を、丸太橋からは右側に深い谷を見ながら緩やかな道を下る。途中、足元が切れ落ちた所や流れを渡る所もあったが沢沿いに進んで12時、一の沢登山口に到着。待っていたタクシーに乗り穂高へ。穂高からJR、バスと乗り継ぎ松本17時30分発のFDAにて福岡19時10分着。足を痛めていた中村さんの途中下山があったが、無事予定どおり山行を終えた。



常念岳への途中の日の出



常念岳山頂（2857 m）の酒匂

— 6. 令和4年度支部活動報告・令和5年度支部活動計画 —

令和4年度福岡支部通常総会報告

◇日時：令和4年 5月29日（日）14時 開会
 ◇場所：福岡市立早良市民センター：早良区百道2-2-1
 会員数：56名 総会出席：16名 委任状：21名
 合計：37名
 各議案は審議され承認された。
 総会後に記念報告会として、宝満山より英彦山「悠久の峰入り古道を歩く」を浦支部長から報告があった。

脊振山系全山縦走「国境の山岳信仰の峯入り廻峰道を歩く」

公益事業として、基山から十坊山への脊振山系全山縦走（約77km）を5回に分けて実施しました。のべ145名が参加、福岡支部担当の古道調査も兼ねて実施しました。

夏山フェスタin福岡2022（第5回）開催

◇日時：2022年6月25日（土）12時～18時30分、
 26日（日）10時～18時30分
 ◇場所：電気ビル共創館（4階 / みらいホール、3階会議室）
 福岡市中央区渡辺通2-1-82
 来場者数：25日約1,400人（2019年1,900人）、
 26日約2,500人（2019年3,200人）
 合計：約3,900人
 その他、当初計画していた岳人のつどい、自然観察会などはコロナ禍により中止となりました。

令和5年度の支部活動計画案

福岡大分県境を歩く（耶馬溪から英彦山）などを検討中
 公益事業として、数回に分けて実施予定。

夏山フェスタ in 福岡 2023（第6回）開催

◇日時：2023年6月24日（土）・25日（日）。
 場所：電気ビル共創館4F みらいホール
 講演予定：女性初8000m峰全14座登頂を目指す福岡県出身の渡邊直子氏、登山ユーチューバー「かほ」氏などのセミナーを予定。

《編集後記》

新型コロナウイルスは、2020年1月の日本はじめ世界的流行（パンデミック）から今年で3年が経過した。オミクロン株に変わり重症者は減少し、最近では「マスク無し」、更には今春には重症化率や致死率の低下に伴い「2類」から「5類」への引き下げへの議論も始まった。3年間の辛抱を経て早く収束し以前のように制限のない山行や各種支部行事ができるようになることを願うばかりである。

昨年は一昨年の「日本の古道を歩く」の宝満山より英彦山に続き、「国境の山岳信仰『脊振山系の峯入り廻峰道を歩く』」の5回の記録が詳細に責任者の浦支部長から報告され、大変貴重な記録になった。また地質の専門家の柴田佳久氏からは同ルートの解り易い地質の解説をいただいた。

一昨年7月に辻和毅氏、昨年2月には前支部長の高木荘輔氏の訃報が相次いだ。前支部長の高木荘輔氏は昨年の支部報（No.35）発行直前のご逝去だったので、追悼文の掲載が間に合わなかった。太田五雄氏から追悼文で両氏に哀悼の意を表したいと寄稿いただいた。

20年前の東チベットのカンリガルポ山群踏査時の「こぼればなし」を中山健氏より寄稿いただき、原義宣氏には佐渡島トレッキング記録、酒匂輝昌氏には北アルプス表銀座コース山行を多くの写真とともに寄稿いただいた。年に一度の支部報発行ではあるが、今年も多くのご投稿をいただき何とか発行にこぎ着けることができた。ご投稿いただいた皆様には感謝申し上げます。来年会員諸氏の積極的なご投稿をお願いします。（K.K）

九州5支部集会（東九州支部主催5支部懇談会）の計画（予定）

◇日時：8月5日（土）午後14時、法華院温泉山荘集合。
 支部集会と懇談会（宿泊）
 ※法華院温泉山荘までは長者原より徒歩2時間、あるいは大船林道の駐車場から徒歩30分、大船林道を車で入りたい方は事前にご連絡ください。
 講演：加藤英彦（前東九州支部部長）、松田宏也（日本山岳会本部理事・千葉支部長）予定。
 ◇8月6日（日）午前、慰霊碑までの登山、『山の安全を祈る集い』後解散の予定。

【お知らせ】

Eメールアドレスをお知らせください。

お知らせなどの即時性、利便性を考え電子メールでの情報発信を行います。まだEメールアドレスをお知らせいただいていない方、変更された方は、下記福岡支部までメールにてお知らせください。

（社）日本山岳会 福岡支部 事務局
 JAC 福岡支部 e-mail: fko@jac.or.jp
 日本山岳会事務局：渡部 秀樹
 TEL：092-715-1557 FAX：092-715-0826

【訃報】

会員番号 6740 堀田 哲男氏（永年会員）は2022年（令和4年）12月29日ご逝去されました。享年86歳

会員番号 5180 石原 國利氏（永年会員）は2023年（令和5年）1月29日ご逝去されました。享年92歳

石原氏は作家井上靖の小説「氷壁」のモデルとなったナイロンザイル切断事故の当事者。日本山岳会は東海支部に所属されていましたが、糟屋郡篠栗町にお住まいでしたので、「支部会友」として支部の新年会合や行事にはいつもご参加いただいております。当支部報にもたびたびご投稿いただきました。

（支部報No.20, No.30, No.32）

ご両氏のご生前のご厚誼に感謝し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。